2023年度　自己評価結果公表シート

富山短期大学付属みどり野幼稚園

1　本園の教育目標

1　心も体も健康でいきいきとした子ども
2　自分の思いや考えにもとづいて、園の生活に取り組む子ども
3　友だちと共に園の生活を楽しみ、意欲的に行動する子ども
4　身近な自然や人とのかかわりに心を動かし、感じたことや考えたことを素直に表現する子ども

2　本年度、重点的に取り組む目標・計画

新型コロナウイルス感染症が５類に移行する中で、生活のあり方や活動内容等を見直し、幼児期にふさわしい多様な経験を保障していく。また、次の２点を重点課題とする。

①　多様な個性に応じた保育内容の検討

②　ICT 活用による保育の充実と子育て支援

＜昨年度の公表シートから：令和５年度に取り組むべき課題＞

①　健康で安全な生活の保障　（継続）

感染症対策にとどまらず、子どもの安心と安全を守る保育に必要な環境をつくる。

②　持続可能な保育記録・計画の検討と PDCA サイクルの充実（継続）

本年度までに取り組んだ記録・計画の作成方法や、教育課程の見直しについて、今後も持続可能なあり方を探っていく。

③　ICT 活用による保育の充実と子育て支援（継続）

子どもの直接体験を重視しながら、効果的なICT 活用を図るとともに、保護者への情報発信及び情報共有のツールとしてのICT 活用を図る。

④　多様な個性に応じた保育内容の検討

一人一人の個性を生かしながら集団としての経験を高める保育内容について検討する。

3　評価項目の達成及び取り組み状況

① 園運営	新型コロナウイルスによる制限が緩和されたことで、交流が拡大した1年であった。日常保育での異学年交流をはじめ、運動会やこどもまつりなどの園行事を全学年合同で行ったこと、遊び大会や同窓会の復活、園庭開放の拡大など、園を中心に子ども・保護者・卒園児がつながる取組みを行うことができた。特に園児間の交流が活発になったことは、それぞれの学年の育ちとなった。行事運営に関しては、すべてをコロナ以前に戻すのではなく、コロナ禍での経験を活かし、適切な空間（広さや音、距離感など）や子どもが安心できる人数規模に配慮して実施した。外国にルーツを持つ子どもや発達特性をもつ子どもなど、多様な個性をもつ園児が、個々のよさを伸ばしながら集団としての経験を楽しめるよう、職員が一丸となって園児理解と丁寧な支援に取り組んだ１年でもあった。職員の業務量や精神的負担など、改善を要する点が多い状況の中で、互いに支え合いながら、確実に園業務を遂行できたことは、職員間の協働性が十分に発揮されたためと評価する。加えて、公開保育や研究発表など、さらなる資質向上に全員で取り組むことができたことは、保育理念と目的の共有によるものと考える。

② 教育課程	継続して取り組んでいる「教育課程研究」を発展的に進め、ウェブ図を用いた週月案作成の効果と課題を整理した。子どもの興味・関心と遊びの流れを理解すると同時に、必要な保育者の関わりや方向性を考えていく保育の進め方が定着し、各スパンでの計画と記録、実践が連関するようになった。また、クラス全員の保育者がウェブ図作成に加わり、対話を重ねる中で、保育実践に込められた意図や願い（園児、クラス）などが共有される効果もあった。PDCAサイクルが進められると同時に、OODAループの実現にも寄与していたと思う。一方で、記録できる遊びの内容や量、記録や計画作成に要する時間などの課題もあり、持続可能な計画作成及び記録のスタイルを確立していきたい。
③ 保育指導	教育課程研究の取り組みをいかし、「つながり（子ども・遊び・もの・自然・社会）」をテーマに保育指導を行った。６月に実施した公開保育では、個々の興味を複数の子どもたちの興味・関心につなぐことで、遊びや仲間関係の広がりを支える取り組みを資料とともに発表した。特に、他児とのつながりを持ちにくい子どもの興味・関心を、遊びを通してつなぐための保育者の配慮や環境構成のあり方について、参加者から高い評価を受け、自園の保育の自信につながった。 園庭にビオトープを設置し、年長児の発案でカブトにおいガメやメダカの飼育を行ったり、つる性植物でガーデンアーチを作ったりした経験が、年間を通した自然に対する好奇心や生命尊重の気持ちを育むこととなった。また、iPadを保育活動や遊びに取り入れるなどして、ICT活用の取り組みを進めることができた。 異年齢交流が増える中で、交流が子どもの主体的な活動の流れの一部となるように、職員間の連携を密にしながら、活動を支える工夫を行った。教育時間終了後の保育や２号認定児の保育は、利用人数・時間ともに増加しているが、グループ編成や保育内容の工夫により、安定した生活時間となるように努めた。
④ 幼児理解	カリキュラムのPDCAサイクルの充実が、個々の園児の理解を深めた。 また。多様な個性を発揮する子どもたちについて、行動の意図や背景にある要因等を理解するため、職員間で対話を重ねた。また、専門機関との連携を積極的に図り、園への訪問・観察と対話を依頼する中で、個別理解が深まり、支援に活かすことができた。
⑤ 健康・安全	新型コロナウイルス感染症が５類に移行したものの、インフルエンザや咽頭結膜熱、溶連菌、RSウイルス、ヘルパンギーナなど、種々の感染症が地域で流行し、園内での感染等に十分な配慮を行った（食事中の衝立を外し配席などは通常に戻したが、一定の消毒や食事前の検温実施などは引き続き実施している等）。また、感染が見られた場合には、いち早く掲示等で保護者に知らせるなど、保健情報の発信にも努めた。 昨年度の園バス事故を受けて、本年度は安全装置（カメラ付き）が２台のバスに装着され、より安全な運行を実施することができた。昨年度、課題としてあげられた園外保育における安全確認（天候や施設状況を詳細に確認し、情報共有を図ったうえで実施すること）や、園内環境のリスク確認が十分に行われたため、目立った事故や園児のケガは見られなかった。しかし、軽微なけがの中には。見通しを持った保育を行えば回避できたものもあった。引き続き、リスク意識を共有しながら、園児の安全確保に努めていきたい。 令和６年１月１日に起きた能登半島地震においては、園内施設の軽微な損傷があり、法人事務局と確認のうえ、必要な修繕を行った。休業中の地震であったため、メール等を使用した園児の安否確認を行った。しばらくは余震もみられたことから、３学期には改めて園児への安全指導を行った。保育中に強い地震がおこる場合を想定し、更なる防災計画の検討と保護者への引き渡し方法の再確認が必要である。なお、本年度に実施した引き渡し訓練では、新たにおがスマを使用し

	た連絡を行い、既読とならない保護者への電話連絡や、既読時間から迎えまでに時間がかかっている保護者の特定など、より効率的に引き渡しができることを確認した。次年度は、引き渡し訓練の時期や内容をさらに検討する必要がある。本年度は新たに不審者訓練も実施した。今後も、園児の生命を確実に守る対策を確立していきたい。
⑥ 子育て支援	保育参加や年中クラスでのプレイディ実施など、保護者と園の保育を共有する機会を積極的にもち、子ども理解や園の保育理解が深まるように努めた。子育ての悩みに対しては、担任が丁寧に対応するほか、主幹保育教諭、副園長が内容に応じて相談窓口となったり、園長の子育て相談を利用したりするなど、園全体で対応するように努めた。また、保護者同志が交流する機会をもち、互いに関係をつくる配慮を行った。保護者会活動については、共働き家庭が増えていることや任意組織であることをふまえて、どのような在り方が望ましいかを検討していくこととなった。父親の会の活動についても、活動内容は望ましいが、名称については時代にそぐわないという意見もあり、保護者との話合いの中で、名称変更等を検討していくこととなった。園と保護者が手を携えて子どもの育ちを支えていくために、どのような仕組みづくりが適当かを、引き続き検討していきたい。 親子サークル活動は、卒園児や在園児の保護者などの協力を得ながら、充実した内容を提供できた。富山市・射水市を中心に、地域の子育て家庭を園全体で応援する取り組みができていると感じており、親子サークル参加者からの入園希望が増加している。特にニーズが高いのは、満３歳児入園であり、本年度は昨年度より受入れ枠を増やし、最大12名の満3歳児を受け入れた。それでも、10月生まれ以降は、ニーズに応ずることができなかった。満3歳児受け入れには人的確保が必要であるため、やむを得ないことではあるが、職員体制を整備し、社会ニーズに応える子育て支援を行っていく必要があると考える。引き続き、検討していきたい。
⑦ 職員の研修及び資質向上	教育課程研究の成果について、東海・北陸ブロック研究大会で2回目の発表を行った（昨年度初回発表）。また、6月には富山短期大学幼児教育研究会の一環として、4，5歳児クラスの公開保育を行い、教育課程研究をふまえた保育の工夫等を紹介した。いずれも、参加者からのコメントを通して、職員がさらに学ぶきっかけとなった。なお、これまでの教育課程研究成果をまとめた内容を、富山短期大学紀要に論文として投稿し、広く公開することとなった。 本年度は県教育委員会の「中堅教諭資質向上研修」対象職員が多くの研修を重ね、その学びを園保育に反映する動きがあったことで、他の職員の学びも向上した。それぞれの職員が、リモート研修や対面での研修に積極的に参加し、新たな気づきや学びを、自らの保育の向上につなげることができた。
⑧ 地域との交流（学園内交流含む）	コロナ禍の制限を脱し、地域や学園内交流が少しずつ回復した1年であった。短大生の実習が平常化したほか、行事や夏季休業中の保育ボランティア参加、ゼミ活動での保育実践等を通して、園児と短大学生との交流機会をもつことができた。また、14 歳の挑戦（中学生）や富山国際大学生の保育サポーターの受け入れ、園児のきょうだいによる保育ボランティアの実施、ダンスチームGOWの講習など、多様な人との交流の輪を維持する取り組みができた。地域企業との交流として、ネッツトヨタ富山の方々との交流行事（マスコット人形との触れ合い、缶バッチ作成）を行い、子どもたちが楽しい時を過ごした。同企業からは絵本の寄贈もあった。さらに、4年ぶりに地域の獅子舞いが復活し、園への獅子舞い訪問には、多くの園児や保護者が集まった。次年度はさらに、学園内、地域企業、地域町内会等との交流を深め、園児の豊かな経験につなげていきたい。

＜**全体的な評価**＞

新型コロナウイルスによる制限が緩和され、園活動に活気が戻ってきたものの、引き続き健康・安全面での配慮が重要であることを認識した1年であった。特に、コロナ以外の感染症、長く続く猛暑、強い地震や津波を想定した訓練、不審者及び人権侵害への対策など、社会的な課題は決して他人事ではなく、本園としても、明確な対応策や予防策を決定し、備えておく必要性があることを確認した。

本園が大切にしてきた「子どもの主体的な活動としての遊び」については、個や集団の育ちの観点から、環境構成や保育者の支援を十分に検討し、より豊かな体験へとつなげることができた。年度当初に想定した以上に、多様な個性を発揮する子どもたちの姿に戸惑うことが多かったものの、日々職員間で対話を重ね、個々の子どもや保護者に向き合い、丁寧に保育を進めることができた。また、子ども理解を深め、生活課題の解決を図るために、積極的に園外の専門機関にアプローチし、多くの専門家のサポートを得ることができたことで、職員自身も安心感を得ることができた。園内外での協働性を育むことは、多様な子どもの姿を受容し、一人一人の豊かな経験を保障することにつながっていくと期待される。

ICT 活用については、おがスマの機能拡大により、預かり保育申請のWeb化や家族情報の本人入力等が進められている。本年度は特に、年長児を中心とした子どもたちが、Ipadを使って、生物を観察したり、関心のある情報を検索し遊びに活用したり、動画を撮影することで遊びを発展させたりする姿が見られた。次年度はiPadを増設する予定であり、一層のICT化が期待できる。

保護者会・父親の会のあり方、バス運行の見直し、保育時間の増加や満3歳児・2歳児の入園ニーズへの対応など、社会の変化に応じた変革が、園に求められていることを実感した。これまでの慣習や常識にとらわれず、常に全職員が、意識をアップデートしながら、一人一人の子どもや保護者に寄り添う保育を展開していきたい。

〈次年度に取り組むべき課題〉

① 健康で安全な生活の保障

自然及び社会の状況を的確に判断し、子どもの安心と安全を守る保育に必要な環境をつくる。また、様々な災害等に備えた計画や訓練を行う。

② 多様な個性に応じた保育の提供

園内外での職員の協働性を高めながら、一人一人の個性を生かし、集団としての経験の質を高める保育を検討し、提供する。

③ ICT 活用による保育の充実と子育て支援（継続）

子どもの直接体験を重視しながら、IICTを保育に効果的に取り入れていく。また、保護者への情報発信・情報共有だけでなく、職員の業務改善ツールとして、ICT 活用を進める。

④ 社会ニーズに対応した園運営のあり方を検討する。

多様な人・機関から知見を得て、新しい園運営のあり方を検討する。

以上の自己評価と保護者アンケートの結果をふまえて、2回の関係者会議（3/5、3/12）を行い、本園の課題や対応について話し合いました。会議での意見を参考に、全体的な評価及び次年度に取り組む課題の修正を行っております。

保護者の皆様や関係者の方の多様な意見を活かし、令和６年度の園運営に当たりたいと思います。

令和 6年 3 月29 日

富山短期大学付属みどり野幼稚園

石　動　　瑞　代